



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第28号



わからなさを愉しむ日々

モーツァルトへの手紙 (その4)

会員番号 K.618 加藤 明

昨年の秋口から、私が勤める「道の駅てんのう」では、全国の道の駅に先駆けて(!?)、終日BGMをオールモーツァルトにしてしまいました。

年間ざっと50万人の利用者をモーツァルトがお迎えする勘定になります。

駅長の個人的な趣味だなんて言わないし言わせない、そう、やはりとても自然で芳しい香りなんです。

モーツァルトよ、『あそこのトイレはアイネ・クライネが流れていてさあ、落ち着いて用が足せたなあ・・・』といった利用者の賞賛の声が全国から聞こえて来ようですよ。

さて、今年はドビュッシー生誕150年、だからという訳ではないのですが、ベルガマスク組曲、子供の領分や12の練習曲集などのピアノ曲をひたすら聴いてきました。

形而上学的な響きというべきか、ドビュッシーには一緒に愉しむというよりは、聴く者に考えさせるといった静かで優しい「突き放し」があるように思います(武満徹にも同様の「突き放し」が分泌されているようですが)。

P・L・エマールのドビュッシーを手にしてから、「脳が囚われる」という悪い癖がぶり返

したのは、この「突き放し」を一層センシブルに聴きとったからに違いありません。

丁度そのころ、エマールがバッハの「フーガの技法」を録音する際の、調律師との格闘を描いたドキュメンタリー映画が週刊誌上で紹介されたのがいけなかった。

友人の調律師K氏にその記事を紹介するまではよかったが、件のCDを注文して手に入れたら、これが完璧にはめられる類のものだったのです。



ピエール＝ロラン・エマール
J・S・バッハ：フーガの技法

UNIVERSAL MUSIC UCCG-1386

ヴァルヒャやゲルドのオルガンでのそれは聴いていたのですが、エマールのピアノ盤には度肝を抜かされてしまいましたよ、ほんと（2007年9月録音）。

バッハ畢生の遺書みたいな対位法の頂点、あのゲルドも半分で録音を終えて何故か完成の日をみなかったこの「フーガの技法」の未完さを想像したとき、途轍もない衝撃が体内を駆け巡りました。

（そういえば、今年は大好きなゲルドも生誕80年・没後30年の区切りの年でしたね）

まるで誰一人として寄せつけない孤高の山に黙々と単独登攀を試みた彼が頂上間際で忽然と姿を消したような衝撃でした（彼はどこに行ってしまったのか??と）。

「彼」とはここではバッハであると同時に、エマール本人でもあったのです。

そしてまた、ひょんなことからマーラーにはまってしまう、これがまたなかなか抜けられない暗闇の瞑想（迷走ともいえる）状態が続き、仲間からも冷やかされることしきり。

決してマーラーの臨終の言葉が「・・・モーツァルト・・・」だったからではありません。

何故かマーラーの言葉遣いというか旋律の綾といったものや意表をついたリズムが心房にジワジワと入室してきては「脳が囚われる」症状を露呈せしめたのです（「巨人」だ、「復活」だと浮かれる私を透かしつつ『そのうちブルックナーが口をあけて迎えるだろう!』とニヤニヤと予言する悪友あり）。

はたまたここに来て、以前から求めていたディキシーランドの雄、ジョージ・ルイスの1963年の日本公演盤が手に入り、これまた新鮮な懐かしさに酔いしれておりました。

ジョージ・ルイスの流麗なクラリネットを聴いていると、《明るい未来を求める精神》といったものが伝わってきて、改めて音楽の恵みというものを噛みしめることができ、特異な至福感を味わうのでした。



貴志康一
竹取物語

Victor VICC-60705

このような国外のものだけでなく、先年偶然古本屋で発見した日本の作曲家、貴志康一の《竹取物語》や《仏陀》などの非常にネイティブな言語的・文化的刺激に富んだ貴重なアルバムからも、相変わらず離れられないでいるのです。

ベルリンフィルを振ったほとんど最初の日本人でもあった貴志は、半端でなく素晴らしい音楽性を発揮した夭折の天才作曲家でした（1937年28歳で他界）。

モーツァルトよ、残念ながら、貴志康一には貴兄の曲を録音した形跡が無かったのはやはり時代背景かなあ、などと考えたりしております。

ことほどさように、音楽という芸術ジャンルに関しては、古今東西垣根なく中毒患者のように侵されているというか、音楽の魔性にどろどろに浸っている風体なんです。

ですから、《音楽という時間芸術が人生の時間を忘れさせる》というアイロニーをつくづく想う昨今でもあります。

と同時に、決まって『わかったつもりでいても、ほんとはわかっていないのではないか?』という根底の疑問を投げ掛けるもう一人の己れに向き合うことになるのでした。

まったく嫌な性格ですが、感動と言葉の核分裂みたいな心象がめずらしくないのです。

感動している、という真実には嘘はつきません。

感動はきつと言葉を拒否しているところに棲息する人生の一大事なのでしょう。

しかし、感動の前では、すべての理屈は後追いなのです。

ですから、『わかっていないのでは?』というこの自問をつい落としがちなんです。

というより、私にとっては、この自問は本来封印されるべきものだと思うのです、が……。

「美はわかるものではない、それは感じるものだ」(小林秀雄)とは至言ですが、それでも『どうしてこんな音楽を彼らは作り、演奏し、我われは聴き、愉しむのだろう』という問いかけが残ってしまうのを止められないでいるのです。

自問という花粉が耳孔から体内のすみずみま

で巡っては我が細胞を侵食していくようなのです。

こんな具合ですので、言ってしまうえば、わからなさを愉しんでいるような日々を性懲りも無く送っている、ということかもしれません。

モーツァルトよ、わからなさついでに、今年の3月に川越市の氷川神社で挙式した姪へのお祝いの挨拶文を抜粋ながら記します。

わからなさの美学なんて偉そうなものではないのですが、お喋りしているうちに「わからない」って棄てたもんじゃない、と再確認させてもらいました。

ところでモーツァルトよ、貴兄はコンスタンツェを、そして、結婚というものが「わかった」のでしょうか?

祝 婚 の 辞

弥生三月、この好き日にK郎さんとA子さんの晴れの結婚の儀が執り行われましたことは、新婦A子さんをよく知る者の一人として、この上ない喜びです。

昨年の中頃は大変に衝撃的な東日本大震災が起りまして、全国的に被災後の復興に向けてようやく動き始めたころでした。

あの千年に一度といわれる災難から丁度一年が経過した今日、本格的な復興の息づかいが加速しつつあるなかで、こうしてお二人の門出をお祝いできることは親族の一人としてだけでなく、国民の一人としての寿ぎ感を懐き、その慶びも一入のものがあります。

私は新婦A子さんの叔父ですが、すでに還暦の峠も越え、論語の訓えによればとくに「天命」を知り、「耳順う」年代に突入しているはずなのに、孔子様に逆らって、いまだに「これでいいのか」と日々自問自答を繰り返している浅学非才の身です。



さて、三月の花を想い描きますと代表格の沈丁花や桃の花が真っ先にイメージされますが、どこか寂しげにポツンと咲いては観るものを慰めてくれる片栗の花は取り分け美しいと思ってまいりました。

かつて、この片栗の薄紫の清楚な美しさを熱心に教えてくれた人物がおりました。その人物は、今は天空からお二人を見守っている私の長兄であり、つまり新婦A子さんの伯父であるT a k a s h iという大変世話好きな善人です。

ここで、この数年前に一足先に天国に引っ越してしまったA子さんの伯父を語るには歴とした理由があります。

それはこのT a k a s h i伯父こそはA子さんの両親を初めてこの世で惹き合わせた張本人であり、実質的な仲人役だったからに他なりません。

遡ること40年、今にして思うと世話好きな孝志伯父の一生を通していても、正に特筆すべき善行であり、加藤家における一大快挙であったことは疑いを入れません。

A子さんの父、つまり私のすぐ上の兄にあたるHさんは、この人の陰口や悪口をつくことは、それを口にした本人に自己嫌悪を催させるほどの作為のない朴訥たる精神を讃えた稀代のお人好しであります。

もっと言えば、いわゆる特有の社会性に欠ける性格が魅力という不思議さを生来備えもった人物なのです。

一方のお母さんのT子さんは大変すっきりした頭脳を持ち合わせ、きっちりと現実を見据え、ものごとにあたっては的確な判断力と行動力を兼ね備えているばかりか、秋田県は雪深い県南の女性特有の辛抱強く慈愛の精神に溢れた賢夫人であります。

さらに申すならば、社会性に富み、夫の不足を健気にしかも絶妙に補い、二人の子供を手塩にかけて立派に育て上げた逞しい人物なのです。

このように、作為なきお人好しとすっきり頭脳と慈愛に溢れる女性との劇的な出会いをプロデュースしたのがT a k a s h i伯父であり、その結果、今日ここに花嫁として祝福されるA子さんその人が目の前にいることに私は感無量の感慨を懐くのです。

どうか新郎新婦お二人には、いま在る自分たちの歴史の裏舞台には様々なドラマが潜んでいるであろうこと、そしてこのように人と人とは深い縁で結ばれているものだ、ということを知っておいて欲しいと思います。

そしてその人間における縁という不思議を脳裡に焼き付けておくことは、今後きつところの駆動に役立つことと思います。



ギリシャの哲人ソクラテスは後世にその名を轟かすクサンチッペという名の悪妻を持つことで知られております。

そのソクラテスはジョークの好きな人で、結婚を躊躇していた弟子の一人に「結婚とは？」と問われたときに、「四の五の言わずに、先ず結婚しなさい。良妻を得れば幸せになり、彼女が悪妻ならきみは立派な哲学者になるだろうから！」と諭したそうです。

このシニカルな言葉に沿いますと、かく言う私は、秋田にいる家内には叱られそうですが、文句なく「立派な哲学者」の仲間入りを果たしているのですが、A子さん、どうかしてK郎さんだけは「立派な哲学者」にならないようご支援ください。

結婚は墓場だといひ、また結婚は極めて便利な生活共同システムともいひますが、そんな迷信や合理主義者の言辞に惑わされず、是非この結婚を機に、お二人がますます《自分らしさ》を掘り起こし、謳歌できるようになって欲しいと思います。

この《自分らしさ》の掘り起こしというのは実はそう容易ではありません。

【わかればわかるほどにわからなくなる】というのが人生というものであり、結婚というものでしょう。

そのわからなさこそ私は人生の、そして結婚の大いなる味わいだと思います。

わからないから愉しみ、わからないから悩み苦しむ、わからないから学習し、わからないから誤解し（当たり前か）、わからないから芸術に耽溺し、そして、「わからないからやってみる」という具合に、わからない魅力が詰まっているのが人生というものかも知れません。

ですから、お二人にはどうかわかったような冷静な目や覚めた目では生きないで欲しい、と心の底から思います。

逆に、行き当たりばったりで不合理な感動にとことん素直に向き合って、必死になって生き抜いて欲しいと願うものです。

きっと《自分らしさ》は何か感動するところからしか掘り起こせないはずです。

お互いに感動している相手を認め、大いに褒め称えながら愚直に歩んで欲しいと切に願うものです。

私たちは生涯他人から何かを与えられることで生きていくしかありません。

『人間は自分が欲しいものは他人から与えられるという仕方ではしか手に入れることができない』（レヴィ・ストロース）という真理をこの結婚を機に是非お考えいただきたい、と思います。

結婚生活という現実にも当然この『贈与の仕組み』は生きているはずです。

A子さん！K郎さんにたくさんのもを与え、K郎さんからそれ以上のたくさんのもを贈られる、そんなA子さんに成ることを親族の一人として大いに期待するところです。

「祝婚の辞」として駄弁を弄してまいりましたが、これで私からお二人への贈る言葉に代えさせていただきます。

いま大好きな片栗の花のつぼみと一緒に微笑んでくれているように思われます。

本日はほんとうにおめでとうございませう。

「ナンネル・モーツァルト哀しみの旅路」(映画・DVD)を観て

会員番号 K.203 松田至弘

ミロス・フォアマン監督の映画「アマデウス」は、1984年に製作され、第57回アカデミー賞の8部門を受賞した作品である。

脚本を担当したのは劇作家のピーター・シェファーで、モーツァルトの死の謎を題材とした自作の戯曲の映画化に当たって、さらに娯楽性を高める内容にしている。

映画史上の業績は、「モーツァルトの音楽を映画のストーリーに統合させた点にある」(エマニュエル・レヴィ)とされたが、公開されると観客は、モーツァルトの天衣無縫で軽佻浮薄な個性に大きな衝撃を受けた。

映画はまもなくDVD化され、2002年になると20分の未公開シーンを加え、ニュー・デジタル・マスター版として甦った。

そして、「アマデウス」の製作から約25年後、今度はモーツァルトの姉マリア・アンナ(愛称ナンネル)を主人公にした映画が製作された。

フランスのルネ・フェレ脚本・監督の「ナンネル・モーツァルト哀しみの旅路」である。

日本では2011年春、渋谷 Bunkamura のル・シネマで公開されたのを皮切りに、全国各地で順次上演されているが、アルパトロス社からすぐにDVDも発売されている。

私は、フォーラス・シネマ館でこの映画を観て、通販でDVDを購入した。少し長くなるが、次にあらすじを紹介してみよう。

* * *

1760年代、モーツァルト一家はヨーロッパ各地を巡る演奏旅行を続けており、ザルツブルクを出発してから3年目になっていた。

映画は、父レオポルトが故郷の友たちへ演奏旅行の様子を報告するところから始まる。

この時、主人公のナンネルは15歳になろうとしており、弟のヴォルフガングは11歳であった。姉弟は、美しい音楽で聴衆を魅了し、共に神童と絶賛されていた。

ブリュッセルからパリに向かう途中、馬車の車軸が故障したため、4人は村の女子修道院に身を寄せることになる。修道院の隣の家には、フランス国王ルイ15世の3人の娘たちが、宮廷から遠ざけられて住んでいた。

ナンネルは末娘のルイーズと親しくなり、彼女が思いを寄せるユークに手紙を渡してほしいと頼まれる。

パリに到着した一家は、ある伯爵邸に落ち着き、王太子妃が逝去したため宮廷が喪に服していることを知った。

一家は黒の服装姿でベルサイユ宮殿を訪れ、レオポルトは御前演奏の了解を取り付けることに成功する。そしてナンネルは、イザベルという女性の案内でユークに手紙を渡した。

それから、一緒にいた王太子の前でヴァイオリンを演奏し、求めに応じてアレグリの「ミゼレーレ」を澄み切った声で歌った。王太子は、「みごとだ、あなたの曲を書くんだ」と称賛し、ナンネルに好意を寄せ作曲を依頼した。

ナンネルは父に、「弟の作曲の勉強に自分も同席させてほしい」と懇願するが、父は、「作



「アマデウス」と「ナンネル・モーツァルト哀しみの旅路」のDVD

曲にはハーモニーと対位法を学ばなければ……それは女性には難しすぎる」と言って許さなかった。

宮廷での御前演奏会の日、ヴォルフガングはヴァイオリンを弾き、ナンネルはクラヴィアで伴奏しながら歌った。父はその演奏に満足しなかったが、母は「最高の榮譽を得た」と言って心から喜んだ。

やがて、一家はロンドンへと出発する。しかし、ナンネルは王太子への恋心がつのも、ドーヴァー海峡を渡らず、カレーからパリへと引き返す。そして、作曲に没頭した。

作った曲を届け再会すると、王太子は「また会えてうれしい。あなたの才能を高く評価する」と言ってナンネルの曲を宮廷楽団に弾かせた。ナンネルもヴァイオリンを弾きながら、そこに加わった。

喜びも束の間、ナンネルが恐れていたことが起こった。王太子と15歳の王女との再婚が決まったのだ。傷心のナンネルは、サン・ドニの修道会にルイズを訪ねる。ルイズは、ユーグが母の違う兄であることを知り、神の道へと進んでいた。

恋が終焉を迎えた時、ナンネルにとって救いは家族の絆のみとなった。そして、ロンドンから父母と弟が戻ってくると、ナンネルは合流して二度と離れまいと心に誓う。

パリ最後の日、夕食後に皆が散歩に出かけている間に、ナンネルは自らの才能を封印するかのよう、自分の書いた楽譜を暖炉の火の中に投じた。

ザルツブルクへと帰る馬車の中で、ヴォルフガングに向けて父の言葉が響く。「ウィーンの音楽家は皆、我々に敵対している。彼らを屈服させるには、圧倒的な証が要る。オペラを書け。大作を書け。作曲家になるんだぞ」と。

映画は、ナンネルのその後の人生を字幕で紹介し幕を下ろす。

映画とDVDを観ての感想や考えたことを記してみよう。

まず、「アマデウス」の時と比較すると、劇場を訪れる観客数に雲泥の差があった。そもそもこの映画は、フェレ監督の家族総出で作られたものであり、配給はアルバトロス社となっているが、大きな映画館で連続して上演されていない。従って、巨大なアメリカ資本で製作され宣伝された「アマデウス」と違い、あまり知られていないのである。

ところで、承知のように、モーツァルト一家は1763年から66年まで、3年5か月を超える西方大旅行を行った。勿論パリにも滞在し、ヴェルサイユ宮殿を訪問して、国王ルイ15世に謁見・御前演奏も行っている。

フェレ監督は、このような歴史的事実を自由に脚色し、モーツァルトの姉ナンネルの物語を作り出したのだ。歴史を背景としたフィクションであり、エンターテインメントである点は、「アマデウス」と同じである。

フェレ監督は、モーツァルト一家が残した手紙や伝記などを読み、少女時代にはすぐれたクラヴィア奏者で才能のあったナンネルが、あるところで記述から消えてしまうことに疑問を持ったという。そして、製作を決意し、「歴史の中に埋もれていく女性の象徴」としてナンネルを捉えたのである。



少女時代のナンネルの肖像

映画では、ナンネルが旅の途中で初潮を迎え大人へと一歩を踏み出す。そして、ヴェルサイユ宮殿で王太子に会って恋をし作曲を依頼され、悩み努力して音楽的才能を開花させていく過程や悲恋を経て作曲を諦めていく様子が描かれる。

ナンネルの音楽を創造し効果的に使うという課題に取り組んだのは、フランスの女性作曲家マリー＝ジャンヌ・セレロであった。

しかし、実在のナンネルは、目的を持って作曲に挑戦したことはなく、彼女のものと思われる楽譜も残されていない、というのが学問上の通説である。

当時はまだ、音楽の生産は男性がするものという考えが一般的で、それが社会の常識になっていた。家長としてのレオポルトもそのことをよく認識していたから、息子のヴォルフガング

を中心に捉え、楽長にするために全身全霊を傾けて教育したのである。

ナンネルの場合、愛好的意識を超え作曲で自己実現を図ろうとか、成人したら女性の職業音楽家になろうとかという夢を持ったことはなかった。

彼女は生涯、父親から自由になるということではなく、家庭で義務として果たさなければならなかった女性としての役割を全うしていくことになるのである。

映画では、馬車による旅の様子、父と母の人物像、一家の家族関係や楽器の練習風景、当時の生活・風俗・演奏会の様子、病気などが細かく描写されていて、あたかもモーツァルトの時代にタイムスリップしたかのような感を憶えた。

吹奏楽と管弦楽

会員番号 K.10 畠山久雄

音楽に関して深い見識をお持ちの方から「秋田県は吹奏楽が盛んで、多くの演奏者が育っているのに秋田市管弦楽団の管楽器に若い人が少ないのはどうしたものか。」というご指摘を受けました。

その通り、同じような疑問をモーツァルト広場の会員の方も感じているのではと、知る範囲で書き留めてみることにしました。モーツァルトと直接の関係はありませんが、お付き合いいただければ幸いです。

高校時代、私は吹奏楽に浸かっておりました。その後には吹奏楽のフルートパートの指導も多く経験し、秋田市管弦楽団においては団長を15年間も努めさせていただきました。ご承知の通り秋田市管弦楽団はプロではありません。よく耳にする学校の吹奏楽も社会人吹奏楽団も、も

ちろんプロではありません。したがって、私がこれから書き留めることはアマチュアの演奏に関してであり、感じた範囲でしかありません。

さて、秋田市管弦楽団の演奏を聴いた方は、管楽器のミスにお気付きのことでしょう。一方、吹奏楽団のミスはあまり目立ちません。では、何故そうなのでしょうか？

手前味噌ですが、最近の秋田市管弦楽団の弦楽器からはとても綺麗な音がして上手です。管楽器の力量が低く、弦楽器の力量が高いという意味で「管低弦高」と言われているようです。ところが、発足当初は弦楽器が劣勢であり「管高弦低」と言われておりました。管楽器は下手な弦楽器を小馬鹿にしていたので、これでは良い演奏にはなりません。そんなこともあり、昔

の秋田市管弦楽団は吹奏楽団より劣っていました。

その後「管低弦高」となったのは、弦楽器奏者が増えたこと、上手な弦楽器奏者により全体の音色が改善されたことにあるようで、管楽器のレベルが低下したわけではありません。

弦楽器が良い演奏をするようになると、管楽器も良い演奏をしようと心掛けるものです。一般的に強奏、いわゆるフォルテに関して吹奏楽は得意です。弦楽器中心のオーケストラがいくら頑張っても吹奏楽のフォルテには敵いません。オーケストラの聞かせどころは弱奏いわゆるピアノであり、クライマックスで感じる充実感はずいぶんピアノとフォルテの差によって演出されます。

フォルテを山の高さ、ピアノを谷の深さに置き換えると、吹奏楽の山は高く、オーケストラの山は高くありません。吹奏楽の谷は深からず、オーケストラの谷は広く深く、その標高差は一般的にはオーケストラに軍配が上がるようです。

残念なことにオーケストラ管楽器のミス的大部分は、広く深い谷底で発生します。お気付きのように管楽器は最弱奏ピアノシモが苦手なのです。ピアノシモでは音程が外れたり、ひっくり返ったり、音が途絶えたりするのです。下手と上手、アマとプロの差が明確に分かるのが深い谷底なのです。

吹奏楽に目を向けてみましょう。フォルテシモは力強く感動的であり、もちろんピアノシモも美しく、少ない演奏経験にもかかわらずミスも少ないことは驚きであります。

何故吹奏楽はこのようなことが可能なのでしょうか。それは、強弱を演出するために実際に鳴らす楽器の数、種類を変えていることも要因です。ざっくり申し上げれば、ピアノシモにおいては楽器の数を減らしたり、小さな音が得意な楽器に担当させることも可能です。

演奏する上で、楽器の持つ標準的な音量より大きい音や小さい音が求められます。しかし、限度を超えると音程が怪しくなったり音色が損なわれたり、様々なトラブルに遭遇するので、幅広い強弱は演奏者にとってストレスです。そこで、大きなストレスを与えないように、かつ全体として良い演奏をするために吹奏楽では楽器の種類や数を調整します。

管弦楽作品を吹奏楽で演奏する場合、編曲者や指導者は大胆な発想転換が必要です。大方の管弦楽作品は弦楽器を中心に進行し、木管楽器や金管楽器の出番は少ないのです。吹奏楽にはヴァイオリンをはじめとする弦楽器がないのですから、ヴァイオリンの代役にクラリネット等の木管楽器を使用するだけでは行き詰まってしまうのです。

そこで、弦楽器の旋律をトランペットのような金管楽器に吹かせる、それにサクソフォンを重ねるなども当たり前に行われています。旋律のニュアンス、楽団の特性、得手不得手を加味しながら、指導者が様々な楽器指定をしてこそ良い演奏が可能になっているのです。そのような試行錯誤を演奏者と指導者が練習の中で行いながら最適な音楽を作り上げます。

管弦楽に話を戻しましょう。管弦楽では作曲家の楽器指定に厳格に従います。管弦楽作品は一定の技量を持った奏者を念頭に書かれていること、演奏者は作曲者の抱いたイメージを忠実に再現したいという思いからでしょう。

プロのように十分な技量を有した演奏家であれば可能なことが、未熟なアマチュアには歯が立たなかったり、イメージと異なる演奏になることは予測できます。

ここまで、書くと吹奏楽は作曲家・編曲者のイメージを壊す演奏をしている、けしからん！と感じるかも知れませんが、私を含め関係者は

決してそのようには感じておりません。若くて演奏経験の少ない奏者が素晴らしい音楽を体験できるのは自由な楽器運用にあるからであり、これからの若い人達にはそのような音楽経験が大切と多くの方が認めています。



突然ですがヴァイオリンに代表される弦楽器は、4本しかない弦でどうやってドレミのような音階が弾けるのでしょうか。左手で適切な位置で弦を押さえ、右手に持った弓で弦を擦るのですが、かなりの練習と熟練を要します。弓で弦を擦る、いわゆる運弓も左手をしのぐ練習と熟練が必要です。

目印もないのに適切な位置で弦を押さえ、正しい音程を得るために、奏者は日夜練習を重ねていますが、正確な位置（音程）は最終的に耳で判断して指を微調整しています。

一方の管楽器は運指と唇の調整などで音階を

演奏していますが、正しい指使いだけでは正しい音程にはなりません。正しい指使いで適切な息を吹き込めば、それに近い音程になりますが、正確な音程は耳で判断して唇や息の圧力で微調整しなければならないのです。

管楽器奏者は気付いていることですが、適正な息で適正な音量、いわゆるメゾフォルテで吹くとほぼ正確な音程になります。ところが、とても弱くピアノシモで吹こうとするとトランペットやクラリネットなどは音程が少し上がります。一方のフルートはピアノシモで吹こうとすると音程が下がります。大きな音フォルテシモではトランペットやクラリネットは音程が下がり、フルートは音程が上がります。

したがって、強弱を表現する場合は、耳で聞きながら息の圧力や唇で音程を巧みに微調整しなくてはなりません。吹奏楽であれ管弦楽であれ、上手な人は無意識あるいは意識的にこれができます。

中学生になって初めて楽器に触った人に、強く吹いても弱く吹いても正しい音程にきなさいと命令したところで、大部分の方は無理なのです。無理だからと何もしないのではなく、様々な工夫で大音量から静かな場面まで演奏できるようにしているのが吹奏楽なのです。

乱暴な言い方をすれば、集団で難題をクリアしているのが吹奏楽、個人技に頼って時にミスをするのが管弦楽かもしれません。乱暴に言えばですよ！もちろん、それだけではありません。

ところで、吹奏楽プレーヤーが管弦楽団で演奏したらどうなるでしょうか。ピアノシモを要求された場合、いきなりトラブルに見舞われることは容易に推察できます。では、吹奏楽所属の奏者全員が駄目なのでしょうか。いやいや、上手な奏者は巧みに対応できます。現に、秋田市管弦楽団管楽器の大部分の方が吹奏楽経験者なのですから。初めは大変でも、全体と自分の音

両方を聞くこと、上手な人に教を請うことなど、それなりに努力することで何とか対応できると確信しています。

秋田市管弦楽団にはそろそろ限界が来ている奏者もいて、世代交代の時期を迎えています。吹奏楽の方が管弦楽の世界に飛び込んで来ることを心から歓迎いたします。

おわりに一言、モーツァルトは吹奏楽では滅多に演奏されません。管弦楽においてもアマチュアにとっては敷居の高い作曲家で、お客様

の望む演奏は困難と感じています。

(注)

個人的見解も敢えて書かせていただきました。長い期間に蓄積してきたことを、全て正確に文章化することは困難で、読む方も負担です。したがって、理解を容易にするために必ずしも正確ではない記述もしております。どうぞご理解ください。

酒とモツの日々 (28)

会員番号 K.488 佐藤 滋

久しぶりに書店に行って、文芸書のコーナーが小さくなった、と感じました。代わりに増えたのは、ハウツウ物、新書、コミックの類で、読書離れだけでなく、本を読む人でさえ、短く簡単で、即効果を狙ったものでなければ簡単に購入しない時代になっているのかな、と思いました。これはCDショップでほとんどクラシック音楽のCDを見かけなくなったこととも繋がっていると思います。

有名な評論家が「時は金よりも大事」と述べていますが、無駄な時間を駆逐し、より短時間で成果を身につけることが、現代を「勝ち抜く鍵」とまで言い切っています。そういう意味では、フィクションにすぎない文芸は無駄の固まりですし、クラシック音楽は時間の浪費でしかないのでしょうか。お酒すら時を楽しむ道具からビジネスのアイテムへと立ち位置がスライドしています。

でも音楽はムダなもので結構だと思っんです。ハンドルの「あそび」と同様、ムダがいかに心と体の健康には大切であるか。香山リカ氏の指摘によると、効率を追求したあまり鬱病になったビジネスマンは、休職して初めて「ゆっくり

すること」の大切さに気づいたといいます。「無駄な時間」を楽しむことが、自分らしく生きることには必要なのです。こういう指摘を受けて、「ムダと効率」はどのくらいの割合が生活にはちょうど良いのか、と質問する人がいるようですが、これも香山氏によると4:6?、5:5?等と数字にこだわるところが、すでに心がむしばまれている証、とのことです。

さて、私的な好みですが、私は最近のベルリンフィルの演奏を聴いて圧倒されますが、さほど楽しくありません。あまりにも完璧で、ムダがなさ過ぎるからです。音楽を奏でる人自身が、効率化を目指しすぎているのではないか、と思われまます。カラヤン時代の勢い余ったミス、ウィーンフィルの不揃い、旧ソ連オケの雄叫び、共産圏オケの素朴な音、朝比奈時代の大阪フィルの木訥さ(大阪市は、大阪フィルへの予算1億円余を無駄の切り捨て、として打ち切ることを検討中)・・・等々。昔の音には人間の営み、ムダを背負い込んでなお、音楽を奏でる人の意気込みと愛着と生活臭が感じられました。

昨年の大震災を経て、音楽とは生きるための芸術なんだ、と思います。レクイエムでさえ、

その音楽は生きている人、残された人の悔恨と
思慕と、明日の希望の為に演奏されるのです。
音楽は、人を慰め励まし、楽しませ癒してくれ
るものですから、声高に存在を主張したり、権
威を誇ったり、完璧を競い合ったり、不純物・
無駄を削り取るほど、本来の音楽から遠ざかっ
ていくように思えるのです。音楽家にとって音
楽は職業ではなく、生き方そのものなのです。
モーツァルトの音楽には、イデオロギーも、時
代背景もなく、ただ一緒に流れる喜怒哀楽の時

間があります。だから普遍性をもっているの
です。

血の通った音楽と、手間暇かけたお酒で「無
駄な時間」を楽しみながら、生きている幸福を
かみしめましょう。幸福とは与えられるもの
ではなく、本人の意志で決まるものです。自分
が幸福だと思うこと、信じるのが確かな幸福
へと導いてくれるのです。そしてモーツァル
トは、いつの時代でも、どんな場所でも、最
高の同伴者なのです。

事務局より

いつもは皆さまよりお預かりしている原
稿を読まずにこの編集後記を書き上げてい
るのですが、今回目にした畠山さんの吹奏
楽と管弦楽に深い感銘と同意をし、私も私
見を述べさせていただこうかなと思いまし
た。

私も中学でトロンボーンを始め現在に至
ります。もちろん吹奏楽部。その後本年創
立50周年を迎えます秋田南高校、神奈川大
学にても吹奏楽、そして社会人になっても
社会人吹奏楽団にて活動を続けております。
秋田に戻ってから数度オーケストラにて演
奏をする機会をいただきましたが、その違
いに心の底から驚きました。畠山さんの文
章にもありますが、ピアノシモが本当に難
しいのです。目から鱗の新しい「気付き」
でした。

吹奏楽が盛んなこの秋田において、もっ
ともっと管弦楽の裾野が広がるよう微力な
がらお手伝いできればと感じている今日こ
の頃です（吹奏楽の管楽器奏者も若いとき
に管弦楽を経験すると自分の音楽観が広が
るはず！）

最後に。本年10月6日に県立秋田南高等
学校吹奏楽部 創部50周年記念演奏会を秋
田県民会館にて開催いたします。秋田県の
吹奏楽の歴史と言っても過言ではない秋田
南高校吹奏楽部の50年を振り返ります。全
国のオーケストラや音楽界で活躍をしてお
ります秋田南高校吹奏楽部OBによる素晴
らしいコンサートになると思います。ご興
味のある方は是非足をお運び下さい。

(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております（H23年12月現在108名）

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田（事務局）080(1673)8322